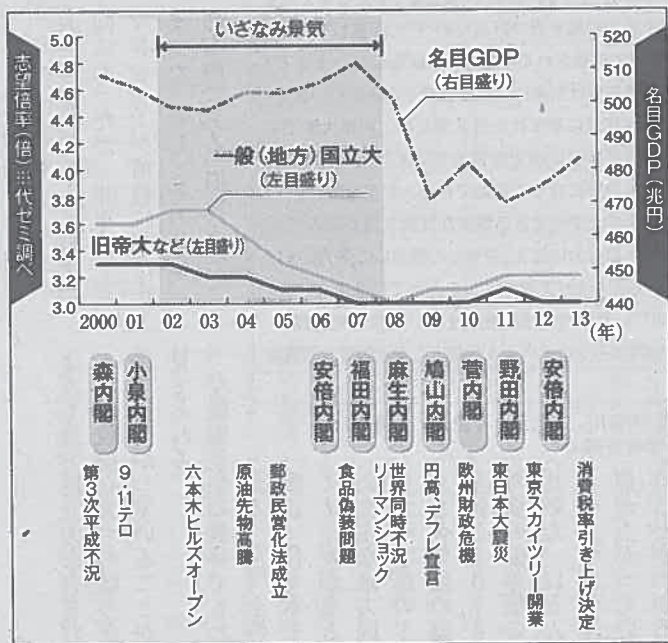


安い学費で人気上昇中!

地方国公立大学の「実力」



正社員就職率
ベスト20
発表



不景気を追い風に人気を高めた「地方国公立大学の人気高騰が止まらない。学費や生活費の安さという、消極的、な理由で学生を集めるだけでなく、就職率のよさなどが高く評価されるようになったのだ。「駅弁大学」と揶揄された時代とは異なる、その「実力」をご紹介する。

静岡大に通う3年生の女子学生は、現在の就職活動で「地元有利」を痛感しているという。

「地元の企業を志望しているんですが、OB訪問などでは「私も静岡なんだ」と言ってくれる先輩が多く、相談に乗ってもらえます」中部地方の国立大を卒業した22歳の女性も同様だ。「地元で働きたいなら、地元の国立大に行ったほうが有利です。面接で「なぜ働きたいの?」という質問に「地元で働きたいから地元の大学に進みました」と答

えられるからです。公務員でも民間でも、それは変わらないですね」好景気では私立大学の人気上がり、不景気だと国公立大学の人気が高まることはよく知られている。いちばんの原因は学費だ。

私大の学費は、たとえば法学部でみると、早大で入学時に約123万円、慶大で約128万円かかる。一方、国立大では、入学金や授業料などは文部科学省の省令で「標準額」が設定されている。入学時に必要な費用の標準額は、約82万円。私大に比べてかなり安くなっている。上のグラフをご覧ください。景気動向の目安として名目GDPの推移と、代々木ゼミナールが調べた国立大学(旧帝大など)と

NHKのドラマ「ごちそうさん」のロケ地となった奈良女子大学記念館(左)と「坂の上の雲」のロケ地となった熊本大学五高記念館(右)

本誌アンケート調査
地方国公立大・正社員就職率ランキング

順位	大学名	所在地	卒業生数 ※1	正社員 就職者数 ※2	正社員率 (%)	大学コメント
1	国際教養	秋田	138	125	90.58	全て英語の授業や全員留学で真の国際人を育成します
2	富山県立	富山	154	135	87.66	入学時からゼミなど「工学心」を育てる教育を実践
3	九州工業	福岡	428	363	84.81	海外でも通用する「人間力」を持つ高度技術者を育成
4	帯広畜産	北海道	185	155	83.78	動物とフィードバックを活用した実践教育重視の大学です
5	奈良女子	奈良	363	303	83.47	全国から学生が集まる女子リーダー育成校です
6	鳥取県立	鳥取	228	190	83.33	「自ら考え、行動する力」が身に付きます
7	高崎経済	群馬	959	780	81.33	ゼミ、部活、課外活動が育む自主性が将来に直結します
8	下関市立	山口	510	410	80.39	4年間のキャリア教育で、高い職業観を涵養します
9	群馬県立女子	群馬	226	181	80.09	充実した留学・キャリア支援で、自ら動く学生を育てます
10	室蘭工業	北海道	398	307	77.14	学生と企業の距離を近づけるため、努力を重んじています
11	小樽商科	北海道	503	380	75.55	企業から高く評価される学生が多く就職に強い大学です
12	広島市立	広島	277	208	75.09	訓練と指導を分けた厳しい英語教育を導入しています
13	北見工業	北海道	259	191	73.75	豊かな自然環境に恵まれた日本最北の工科系大学です
14	長岡技術科学	新潟	74	53	71.62	企業での長期実務訓練で実践的で高度な技術者を育成
15	神戸市外国語	兵庫	393	280	71.25	広い国際的視野に立つ活躍できる人材を育成します
16	大分	大分	293	207	70.65	少人数の大学だからできる親身な就職支援が強みです
17	山形	山形	710	497	70.00	今後も学生の努力に応え、企業との橋渡しに注力します
18	秋田	秋田	1244	840	67.52	低学年からのキャリア教育に力を入れています
19	神戸	兵庫	802	537	66.96	就職率97%。就業力育成に重点を置いた教育を実践
20	一橋	東京	1742	1165	66.88	世界と協同するグローバル人材輩出に向け教育を構築中

※1=旧帝大、および、都道府県の人口ベスト5（1東京、2神奈川、3大阪、4愛知、5埼玉）を所在地とする国公立大を除く ※2=卒業生数は大学院進学者を除く

より地方国公立大が含まれる「一般国公立」のほうが倍率が上がっていることが見てとれる。受験偏差値の推移でもわかる。左ページの表は、代々木ゼミナールがまとめた主な地方国公立法学部の1983年度の偏差値と2014年度の偏差値の比較だ。ほとんどの大学で偏差値が上がっていることがわかる。一方、同様に示す。90年代初期は、いわゆる団塊ジュニアが私大の偏差値を押し上げた。この私大バブルが00年を前に崩壊していること

す。企業側が「育てたい」と可能性を見いだすケースが少なくないようです」

武元氏によると、地方の国公立大は総合的な教育が主流なため、優れたゼネラリストが輩出する伝統があるという。

「ヘッドハンティングで声をかけさせていただくOBも多いですね。業界としては製造、小売り、流通、サービスに目立ち、印象に残っている大学は信州、金沢、広島、長崎大でしょうか」

もともと、地方の大学に通う学生が、都市部で就職活動をするには不利な面もあるだろう。実際、奈良女子大に通う3年生が、地方

学生のハンディキャップを打ち明ける。

「就活が始まり、月に2回ほど東京に行って、説明会や面接を受けていますが、交通費だけで貯金がなくなってしまう。やはり東京での就活では、首都圏の大学に通ったほうが便利だとも痛感しています」

ただし、それに打ち勝つ「強い精神」が、プラスに働くという指摘もある。

「経済界で活躍する地方国公立大学OBは、大学とは別の都市に就職した人が多数です。やはり「自分が住んだことのない大都市で働きたい」との意欲をもつことが、人材としての成長

に寄与したのではないでしょうが」（前出の武元氏）

国立大学協会で副会長も務める、熊本大の谷口功学長は、

「79年の共通一次試験実施前のほうが、優秀でユニークな学生が多かった気がします」と振り返る。

「共通一次の実施で、同じような偏差値の学生がそろい、学生の質がやや画一化したと思いますね。さらに90年代は都市圏の私立大との競争が生じ、学生を相当に「持っていた」こともありました」

その流れが変わったのは、やはりリーマンショックの08年ごろ。優秀で個性的な学生が地方に戻ってきたという。

「インターネットなど情報網の整備により、大都市に住まなくてもさまざまな情報にアクセスできるようになりました。これも追い風だったと思います」

大学では、学生の志望する専門課程を大切にしながら

地方国立大学・法学系学部における偏差値の変化

大学名	1983年度 偏差値	2014年度 偏差値	増減
岩手	51.4	54.0	2.6
筑波	59.7	66.0	6.3/6.3
千葉	57.2	60.0	2.8
新潟	55.7	61.0	5.3
富山	51.3	53.0	1.7
金沢	60.2	60.0	-0.2
静岡	57.7	57.0	-0.7
神戸	60.7	65.0	4.3
鳥取	53.2	54.0	0.8
岡山	58.9	60.0	1.1
広島	54.8	63.0	8.2
香川	52.7	59.0	6.3
愛媛	53.8	56.0	2.2
熊本	59.0	58.0	-1.0
鹿児島	54.3	54.0	-0.3
琉球	49.2	54.0	4.8/5.8
東京	70.8	70.0	-0.8

代々木ゼミナールの偏差値に基づく ※=複数学科

「現場の努力で教育水準を維持してきましたが、さらに予算が削減されたり、寄付金が減少したりすると、多くの地方国公立大は干上がりがねえせん」

そして少子化の問題がある。少子化で旧帝大や都市

90年代における
主な私立大学の偏差値低下

大学名	1983年度 偏差値	1999年度 偏差値	増減
成蹊	67.4	59.9	-7.5
上智	74.0	67.7	-6.3
慶應	76.2	69.9	-6.3
青山学院	69.6	63.7	-5.9
学習院	68.3	62.7	-5.6
成城	66.1	60.7	-5.4
立教	68.8	63.7	-5.1
京都産業	61.9	57.2	-4.7
早稲田	72.9	68.3	-4.6
法政	66.3	61.9	-4.4
明治	68.6	65.3	-3.3
立命館	68.0	64.7	-3.3
同志社	70.4	67.4	-3.0
中央	69.5	66.9	-2.6
関西学院	67.3	64.7	-2.6
関西	64.8	63.4	-1.4

らも、戦前から続く「教養主義」の伝統も大切にしているという。

「ちよつとの逆境では音を上げない、ずぶとい学生が育っています。そんな学生を企業の方々が評価してくださっていますね」

一方で谷口学長は地方国公立大の将来には、危機感を抱いているという。まずは予算の問題だ。

「現場の努力で教育水準を維持してきましたが、さらに予算が削減されたり、寄付金が減少したりすると、多くの地方国公立大は干上がりがねえせん」

そして少子化の問題がある。少子化で旧帝大や都市

部の有名私大の難易度が下がれば、地方国公立大では優秀な学生が集めにくくなると危惧するのだ。河合塾の試算では、現在の小学校低学年が大学受験に臨む25年からは受験人口は急速な減少期を迎えるという。

「地方大学は定数削減が必要かもしれません。とはいえ、大学としての存在感を示すことを考えれば、一定数の卒業生も必要です。これからも各大学とも知恵を絞っていくのではないのでしょうか」

国公立と私立、都市と地方。各大学が切磋琢磨することで、大学の質が高まっていくことを期待したい。

ずぶとい学生が
育つキャンパス

地方国公立大の就職の「実力」を調べるため、本誌は全国の国公立大にアンケートを実施した。有効な回答があった地方の国公立

大手ヘッドハンティング会社「サーチファーム・ジャパン」の社長を務め、自らも16年間、ヘッドハンティングを担当している武元康明氏は、地方国公立大の学生についてこう話す。

「素直な学生が多く、会社の「カラー」を吸収してくれるという評価も耳にしま

がわかる。

この二つの差は年代が異なるので単純に比較できないが、私大が低迷し、地方国公立大が上昇してきた傾向はわかるだろう。

人気だけでなく、地方国公立大の「実力」も評価されてきている。「就活下剋上」(幻冬舎新書)などの著書がある大学研究家の山内大地氏は、企業の地方国公立大へ向ける視線が変わってきているという。

「私立文系の受験科目は3教科ですが、国公立は5教科が基本。よく勉強しているため、企業の中には、都市部の私大生より、地方の国公立大の学生を積極的に採用しようとする動きもあります」

大55校のデータを分析して、「正社員就職者数」の卒業生に占める割合、「正社員率」でランキングにしたのが上の表だ。

参考として、本誌2月21日号で紹介した「著名400社就職率ランキング」(大学通信調べ)でトップだった一橋大も掲げた。すると、秋田の国際教養大は90%を超える正社員率で、一橋大を上回った。国際教養大だけでなく、9位までの地方国公立大で、卒業生の8割以上が正社員になっていた。

上位大学の「セールスポイント」は大学コメント欄を見ていただきたいが、企業からの高い評価などを誇る自信のコメントが多い。